

# 広島原爆語り継ぐ

## 元県在住被爆者

①

「原爆手帳を持ってたら就職も結婚もできなくなる。けがもなく、元気なんじゃけ、結婚をめどに取ればいいよ」。転勤族の夫と1982年ごろから約10年間、松山市で暮らした小泉喜代子さん(74)＝広島市佐伯区。父の言葉に従い、長年被爆者と明かさず生活してきた小泉さんは今、広島平和記念資料館のピースボランティアや、他人の体験を語る「被爆体験伝承者」活動に取り組み。被爆者として原爆の恐ろしさや平和の尊さを訴える思いや半生をたどった。

45年8月6日、小泉さんは 部屋にいたため無事だった爆心地から約2.5kmにある 爆発で屋根は大破し、爆心地に面した部屋のガラスが、爆発で屋根は大破し、爆心地に面した部屋のガラスに父と母といた。当時2 は粉々になった。母が覆いかささるよう守ってくれた。記憶は全くない。後で聞いた話では、3人とも裏手の ぶさるよう守ってくれた。その日、大量の黒い雨が

降り、2階の寝室の布団が 黒く汚れた。真っ黒の布団をしばらく使っていたとい 「枕元に放射性廃棄物を置いて寝起きしていた」。家の外壁も黒い汚れがこび

り付いたままだった。5年後、小泉さんが入学したのは多くの犠牲者が焼かれた己斐小学校。校庭の隅に土が盛られた場所があり、上級生から「上がったらだめよ。骨が入るとるから」と教えられた。運動場に生ごみを埋める係の6年生が「掘り返した場所から今日も骨が出てきた」と話しているのを度々聞いた。

12歳で亡くなり「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんとは1学年違い。像を作るための募金活動に協力もした。

一般的に皮膚に赤い斑点が出る原爆症の印だと言われている。赤いできものを見つげると子ども同士で「お前原爆症じゃ」と冗談を言い合う環境だった。

「子どもの頃は周囲に原爆症の人がいることは珍しくなかった。原爆が落ちれば、こういうことが現実化してしまう」と小泉さん。とはいえ被爆者と明かすことも平和活動に積極的に取り組むこともない暮らしの転機が訪れたのは、「あの日」から40年以上がたち、被爆者健康手帳を手にした後だった。

## 惨禍後の子ども時代



己斐小学校入学時の小泉喜代子さん(前列左から4人目)。在学中に先生や同級生が原爆症で亡くなった＝1950年4月、広島市(小泉さん提供)

# 身近な人々に原爆症

「あの日」から40年以上がたち、被爆者健康手帳を手にした後だった。(河端渉)